

# 養徳社の風景(二)

福家 崇洋

令和元年度研究会会論考  
EURO-NARASIA Q vol.16より続き

## 4 大和文学会の設立

草創期を支えた人びとが退社していくなかで、養徳社は敗戦後にどのような活動をしたのだろうか。

復興に向けた取り組みに熱心だったのが中山正善である。彼は「これから日本はどうなるのかと、みんなが呆然自失する中、二代真柱は別で、養徳社の月一回の編集会議には毎回必ずウイスキーを提げて参加した。会議の後みんな一杯やりながら「関西の岩波をつくるんだ」というのが真柱の口癖だった」と「創設のころ 養徳社創立六十年」にはある。(※註74)

たしかに、養徳社の刊行ペースはいささかも衰えていない。戦前から始まる養徳叢書は日本篇と外国篇に分かれ、日本篇は武者小路実篤、吉井勇、室生犀星、内田百閒、佐藤春夫、亀井勝一郎らの名作を復刊した。外国篇は1946年から始

まり、ロマン・ロラン、胡適(吉川幸次郎訳)、フロマンタン、ヴァーグナー、パスカル、サント・ブーヴなど外国の作家、芸術家のものが精力的に訳されている。

こうした戦時下の「鎖国」から解放された国民の知識欲に応えるべく、文化講演会も催している。記録に残るのは、1946年4月19日に天理図書館講堂で行われた会津八一の、「文化日本の反省」という題の講演である。(※註75)

一方で、地域の文化をどのように再興するかという視点も一貫してあった。奈良県教育会の『大和史料』上中下巻を、敗戦を挟んで刊行したほか、佐藤小吉『飛鳥誌』(発行先は天理時報社、販売は養徳社)や小林剛編『正倉院御物並に七大寺秘仏に就いて』などの刊行に取り組んだ。

また、養徳社が主導したわけではないが、地域の文芸復興にも関わった。それが大和文学会である。その創立は1945年11月で、中山正善が会長、富永牧太（天理図書館長、養徳社発起人・役員）が常任理事、上村孫作（天理時報社歌壇選考）が理事に就任した。（※註76）翌年2月には亀井勝一郎を招いて創立記念講演会を図書館講堂で開催した。講演の題は「精神の自由」というもので、終了後は亀井を囲んで座談会も行われている。（※註77）

大和文学会は、大和に在住する文学者相互の親睦をはかりあわせて文化日本の建設に寄与するというのが目的であった。その目的を具現化するのが雑誌『大和文学』である。創刊号（1946年6月）に掲載された中山正善「創刊のことは」には次の意図が記されている。

……この大和の地に再び文学の花が咲き匂ふやうにするには、何といひましても、今現に大和の地に住んでゐる人々の奮励に俟つより外に道のないことはいふまでもありません。私共は大和の地が日本文学のふるさとしての意味に於いてのみの光榮に永久に甘んじることであるべきではありません。古くして新しいことこそ私共の誇りとしなければなりません。今度、大和文学会が創立され、この地に新しく文学熱が昂揚する機運となりましたことを、さういふ意味で、私は大和に生れ育ち大和を愛するもの一人として、喜ぶものであります。（※註78）

吉村正一郎、安田章生、富永牧太、きだ・いつゑ、湯浅那羅、増田晴天楼、阿波野青畝らが寄稿し、前川佐美雄も短歌を投じている。

原稿募集を通して新人の発掘に力を入れていたようだが、その後の詳しい活動はよくわからない。再びその記事が『天理時報』に登場するのは1947年6月になってからである。

この記事では、季刊『大和文学』を発刊し、「新しい構想で再出発」することが伝えられた。あわせて、会設立以来の活動概要も記され、「文化講演会や雑誌発行などで文化活動をつづけていた」とある。（※註79）

実際、『大和文学』の第1集が1947年5月、第2集が1948年7月、第3集が同年10月に刊行された。いずれも発行所は養徳社で、大和文学編集部も養徳社内には置かれた。

第1集刊行の経緯はweb上で公開されている田中克己の日記から追うことができる。（※註80）1947年1月頃から「大和文学」刊行の話が出ており、養徳社の関係者や保田與重郎と連絡を取りながら、刊行に向けて準備が進んでいる様子がわかる。保田は1945年3月に応召されて中国大陸に派遣、敗戦後の1946年5月に故郷である奈良の桜井に戻っていた。

「再出発」にあたって、大和文学会は古野清人（天理語学専門学校校長）、保田與重郎、田中克己、池田小菊（志賀直哉に師事）を新会員として、全国の文化人、文芸家に呼びかけた。（※註81）奈良を足場としつつも、全国に伸びていこうとする意気込みが「編集後記」に次のように記されている。

日本人が初めて文化的な国家を築いたのは大和の地であり、日本文学の最初の芽はここから生れた。即ち大和は常にこの国の文化を論ずる者にとつて、先づ考へられ  
る地である。

その後文化の中心は、大和から京都へ、京都から東京へと政治の中心の移行と相並んで転移して行つて、現在大和は昔日の文化を偲ぶ地に過ぎない。然し過去の歴史が示すように、政治の中心地にのみ文化が栄えるだけでよいのであろうか。否文化の中央偏在は決して何時までも健全な社会の発展とは言えない。この国が精神文化の優れたものたるためには、ひとり政治の中心地のみならず僻遠の地にも地方色豊かな立派な文化が、——狭い地方に閉ちこもらずに、その風土的特色を生かしつつ広く全国に普遍性を持った文化が——地方の人々の努力によつて生れなければならない。大和文学会はこう云ふ見地から生れたのである。（※註82）

これは編集委員の瀧井芳次の執筆である。他の委員は田中

克己、保田與重郎、前川佐美雄、吉岡武雄で、瀧井と吉川が天理教側になる。（※註83）

各号には、彼らの関係者が投稿した。第1集には保田與重郎「みやらびあはれ」、鈴木治「スタンダール」、釈迺空「飛鳥をおもふ」、神西清「軽の蓮池」の各文、田中克己、前川美佐雄、阿波野青畝の「詩歌句」、吉井勇、田中、阿波野が選者となつた短歌、誌、句、また松本櫛重、中村幸彦、吉村正一郎、池田小菊、服部正己、長沖一、上司小剣の文もそれぞれ掲載された。

このメンバーを見ると、『大和文学』を主に支えたのは保田、田中、前川といった『日本浪漫派』『ユギト』に近い人々である。彼らが戦時期の天理時報社との関わりをへて、戦後に奈良や大阪の関係者の力を借りながら再結集しようとしたのが『大和文学』であつたといえるのではなからうか。そして、この動きを後押ししたのは養徳社であつた。（※註84）

## 5 養徳社と雑誌『玄想』

日本浪漫派の流れとは別に、甲鳥書林以来の人脈も養徳社に受け継がれた。

この流れを受け継ぐうえで、庄野誠一がはたした役割は大きい。養徳社の立ち上げに際して彼が入社を誘われたことを

伝えたが、誘った矢倉や同僚の木村はすでに社を去っていた。木村は、「折角私を養徳社の仕事の片腕と目していたに違いない庄野誠一氏に対して、一抹の後めたさが無いではなかった。私の願い〔養徳社退社のこと 引用者〕を聞いたときの庄野氏の慚然の思いを漂わせた微笑とともに、それは今も根深く消えない。」(※註85)と回想する。

庄野も編集にかかわる形で、養徳社から雑誌『玄想』が1947年3月に創刊された。名前の「玄想」は *Parisee* と表記される。創刊号「編輯後記」に、「思念こそ人間の偉大を形成する」といったパスカルの言葉は、文化国家としての出発をする我々にとつては、最もあやまれ易いが、しかし謙虚に味ひ直すべき箴言である」とあるように、「他民族の思想」を「完全に咀嚼し、消化し、必要な栄養分のみを吸収する健全さこそ望ましい」とされ、(※註86)当時の表層的な「民主化」に必ずしも迎合しない姿勢を打ち出している。

編集部員は安藤直正、藤田秀彌、三村啓吉、吉岡武雄、庄野、生駒藤雄、鈴木治である。(※註87)吉岡と庄野の間に線が引かれているので、直接の担当は安藤から吉岡の4名だったのかもしれない。庄野の名前が見られるのは3号までである。

3号までは特集が組まれ、「美について」「嘘について」「騷について」と並ぶ。執筆者はどちらかといえば京大、三高、京都関係者が多い。創刊号では植田壽蔵、井島勉、鈴木大拙、

貝塚茂樹、2号では西谷啓治や湯川秀樹、新村出、深瀬寛寛、3号では西田直二郎、伊吹武彦、鈴木大拙らがいる。以後の号では瀧川幸辰、山内得立、高山岩男らの文もある。また、作家では岸田国士(きしだくにお)がかなりの頻度で投稿している。ほかには、生島遼一によるブリュイエル「人間について」の翻訳や、亀井勝一郎の文、田中克己や伊東静雄の詩があり、『大和文学』との関係を想起させる。(※註88)

執筆陣を見ると、これまでの経緯から、貝塚、湯川、新村出、武者小路実篤、大山定一、吉川幸次郎など甲鳥書林(甲文社)系の執筆陣が多いが、長谷川如是閑、福田恆存(ふくだつねあり)、山正善の東京帝大時代の師)、長与善郎、三好達治、佐藤信衛、大熊信行など新たな執筆者も開拓していることも『玄想』の特徴のひとつである。

図書、雑誌を刊行するかたわら、養徳社は社の再建にも取り組んだ。1948年5月に開かれた第4回臨時株主総会では役員の変更を行った。社長岡島、専務取締役松井忠義、常務取締役生駒が退社して、社長に東井三代次、専務取締役に上田理太郎、常務取締役に庄野が就任する。東井は衆議院議員なので、実質的には天理教の道友社で書籍出版に関わってきた上田と「同社企画編集に努力してきた」庄野が中心となっていた。(※註89)

同じ月に270万円の増資を行い資本金300万円の出

版社となり、東京銀座に東京支社を、「京都にあった設立準備事務所をそのまま京都支社」としたと「創設のころ 養徳社創立六十年」にはある。(※註90)

しかし、翌年以降の出版不況や東京の出版・印刷業界の戦後復興にともなう、関西の出版社は苦境を強いられることとなった。養徳社も例外ではなく、1950年夏から秋にかけて事業の縮小整理を断行せざるをえず、これまでのように本を出版することも難しくなっていく。

あわせて、設立から編集に携わってきた庄野誠一も退社することになり、1950年4月には一家で奈良から東京に戻った。こうして、養徳社の事業も大きな転機を迎えた。

## 6 『世界』から『心』へ

養徳社は「関西の岩波」を目指していたが、当時の岩波書店から出た刊行物と比較すると、戦後の「民主化」をめぐる温度差を感じることができる。例えば、岩波からは野坂参三、羽仁五郎、風早八十二『野呂栄太郎と民主革命 一九三四年二月十九日を記念して』や岩波文庫からエンゲルス著、西雅雄訳『家族・私有財産及び国家の起源 リュウイス・エッチ・モルガンの研究に因みて』など共産党、共産主義運動に関する文献を刊行している。

一方、養徳社の執筆陣は主に甲島書林と日本浪曼派の人脈で、岩波のような傾向は見られない。

ただし、岩波書店から1946年9月に創刊された雑誌『世界』になると、少し様子が異なる。この雑誌の主力メンバーはもともと同心会に属す人々であった。

この会は敗戦間際にできた三年会という組織に由来する。小磯内閣で外務大臣をつとめていた重光葵の意向を受けて、その秘書官をしていた加瀬俊一政務次官がまず山本有三に会の発足について相談、山本から志賀直哉に、志賀から谷川徹三に相談するなかでメンバーが固まっていた。

西田幾多郎を名誉会長として（しかし1945年6月没）、田中耕太郎、安倍能成、志賀直哉、武者小路実篤、谷川、和辻哲郎、富塚清である。彼らは、敗戦後の国内混乱防止を話し合うために、1945年1月に第1回会合を開き、以後5月まで約10回開催されたが、自然消滅にいたる。敗戦後の9月に、三年会は同心会となって再出発した。(※註91)

『世界』は当初、この同心会の人々が主に投稿していた。先に名前の出た安倍、和辻、武者小路、谷川、志賀、富塚、田中の面々である。また、武者小路の縁と思われるが、里見弴<sup>さとみ じゆん</sup>、長与善郎、柳宗悦、中川一政ら白樺派の関係者も見られる。

あわせて見逃せないのが湯川秀樹、中谷宇吉郎、柳田國男らである。武者小路、里見、中川は甲鳥書林、甲文社、養徳社に関わってきた人物で、湯川、中谷、柳田も同じであることを考えれば、『世界』は同心会メンバーだけでなく、関西の甲鳥書林、甲文社、養徳社の関係者によって当初は担われたと考えることはできる。

しかし、『世界』は、編集長をつとめた吉野源三郎の意向もあつて、丸山眞男ら新進の社会科学系の執筆者が多くを占めるようになり、次第に同心会関係者の割合が少なくなっていく。

(※註92)

「大正」期以降、新しき村の運動に取り組んでいた武者小路実篤は、日米開戦の半年後の1942年5月に『大東亜戦争私感』を河出書房から刊行、アジア主義に基づく「大東亜戦争」肯定論、天皇を仰ぐ日本人は一致団結で強くかつ優しいなどの日本肯定論を書き、1946年9月から公職追放になっていた。背景には、時局に加担した人々と若い世代との思想的、文化的な違いがあつた。

このため、同心会メンバーのうち、武者小路実篤は新たに雑誌『向日葵』を1947年1月に向日書館から創刊した。編集は武者小路があたり、顧問には志賀直哉、長与善郎、梅原龍三郎が就いた。(※註93)執筆者は白樺関係者で、それ以外には千家元麿、中川一政らを含む。同心会関係まで広がらないまま、3号(1948年1月)で終わった。

この雑誌は同年7月に創刊される『心』に引き継がれた。『心』は『向日葵』を改題したもので、当初は発行所も同じ向日書館だった。「巻頭言」には最高の雑誌を作りたいと思つて生成会を結成したこと、「自由を愛し、自己の本来の生命を完き姿で生かしたいと本気で思つてゐる人に愛され、ばそれいゝのだ」などと、(※註94)「大正」期の「デモクラシー」、教養主義、生命主義の名残を伝える。しかし、その本当の意図は、武者小路が安倍能成を追悼するなかで次のように明かしている。

僕が安倍君と親しくつきあうようになったのは何と言つても「心」をつくる事を決心した時だ。当時僕は追放になつていたし、日本の国情も混乱しかねない時で、僕が追放になつた元因も、ある思想の人が、僕を追放する為に相当の努力をしたような様子が見え、僕は僕を追放した御返礼としても「心」をつくり、僕が信頼する、又国民の多くから信頼されている人々に集つてもらい、日本の平和を本当の意味で守りたいと言ふ事を僕らしく考えた。

(※註95)

執筆者は、『向日葵』の後継誌ゆえに、白樺派関係者が主軸となる。武者小路、長与善郎、梅原龍三郎、千家元麿、中川一政、柳宗悦、志賀直哉、高村光太郎らである。この縁をきっかけに、柳の師にあたる鈴木大拙(のちに生成会入会)が創刊号巻頭論文を書いた。(※註96)他方、同心会以来の田中耕太郎、



安倍能成、和辻哲郎も書いている。つまり、白樺派と同心会の主副を反転させながらも、初期の『世界』と同じ布陣が『心』でも布かれていたことになる。

忘れてならないのは、京都の甲鳥書林、養徳社との関係である。『心』創刊号には養徳社の広告が掲載された。両者に関わった武者小路実篤を介したのかもしれない。彼から養徳社の庄野誠一に宛てた手紙が残されている。その中で「先日『心』の木村〔修吉郎、『心』の編集者〕宛の御手紙拝見、是非御原稿出来た時戴きたく思っております、／『文体』の御小説旅行中に読み横光氏矢倉氏が過不足なしに、いかにもそうありそうに立体的にかけてみたので木村にその話をしたら、早速御たのみしたと申してみました」とある。(※註97)この「文体」の御小説とは、『文体』1948年2月号に発表され、前年亡くなった横光利一をはじめ、庄野、水上、矢倉、中市がモデルとなる「智慧の環」のことを指す。これにかぎらず、『心』と養徳社の交流はあったと推察される。

さらに『心』創刊号に新村出の文章が、1巻3号に吉井勇の歌、1巻4号に川田順の歌、1巻5号に吉井と柳田(※註98)の文、1巻6号に中谷吉郎の文、2巻1号に新村の文と川田の歌がそれぞれ掲載された(以後の号は略)。創刊号掲載の「生成会同人」によれば、彼らはすでに同人となっていることも確認できる。(※註99)

## おわりに

以上、本論では、養徳社の設立前後や敗戦後の軌跡を追いながら、そこにいかなる交流圏があったのかを見てきた。

あらためて述べれば、天理時報社時代にあった日本浪曼派との交流がその後の、養徳社から戦後に刊行される『大和文学』創刊へとつながっていったこと、養徳社に合流した甲鳥書林の人脈がその後の養徳社の多彩な図書刊行に大きな影響を与えていったこと、養徳社の設立と戦後の再編により『人間』『世界』『心』といった戦後を代表する東京の雑誌に関西の養徳社や甲鳥書林、甲文社に関連した人脈や影響が及んでいたことを明らかにしてきた。

ただし、本論では交流圏といっても、雑誌を中心にさわりを述べたにすぎない。また、この交流圏が同時代の思想にいかなる影響を与えたかも今後考えていく必要があるだろう。

例えば、本論の最後でふれた『心』は戦後の「保守主義」を代表する雑誌と言われる。(※註100)しかし、同時代における他の類似的な雑誌を見ても、「保守」が主要なテーマだったようには見えない。頻出するのは、「戦後民主主義」に対応する、近代、人間、ヒューマニズム、文化、民主主義といった文言である。

それは『心』も同様である。(※註廻たしかに鈴木成高「保守といふこと」が同誌に掲載されたが、生成会同人ではなかった彼の投稿をもって一義的に『心』を「保守主義」のようにとらえてしまうことは問題である。むしろ、本論で示したように、まずは甲鳥書林から養徳社をへて戦後のさまざまな出版社と雑誌『玄想』『人間』『手帖』『向日葵』など)へ流れていく系譜や、同時代における各媒体の比較こそ、同時代の思想とその源流を検討するうえで、重視されるべきではなからうか。

現時点での暫定的な印象を綴っておけば、『心』のような戦後の文化系論壇の思想は「大正」期の「デモクラシー」や「教養主義」の〈出戻り〉と言えるのではないか。〈出戻り〉とは、一時的ないわゆる「ファシズム」への接近を経て、そこから戦後の「民主主義」論へと接近することである。

これが久野収らによって「保守主義」とみなされた背景として、世代差を考える必要がある。例えば、武者小路実篤は1885年、吉井勇は86年生まれで、1910年、22年、27年にそれぞれ生まれた久野、鶴見、藤田とはかなりの開きがある。後者の人々は「大正デモクラシー」体験が希薄で、武者小路らの世代の〈出戻り〉を理解できず、むしろ「ファシズム」から「戦後民主主義」へ接近した人々ととらえられたのではなからうか。よって、「大正デモクラット」や「オールド・リベラリスト」などと表現するよりも、ネガティブな意味での

「保守主義」と見なす方がしっくりきたのではないかと思われる。この両者の世代の狭間にいたのが1907年生まれの鈴木成高で、彼の「保守」論は、久野・鶴見・藤田の世代とは違つて、「大正デモクラシー」の〈出戻り〉と体制化を、ポジティブにとらえた「保守」という思想で位置づけようとしたと思われるが、成功しなかったといえよう。

「保守主義」という時にレットルとして漂泊する思想を、当時の交流圏を参照しながら対象化し、その時代背景における思想的意味を析出していくことが今後の研究では必要だろう。

(了)



ふけ・たかひろ

1977年、徳島県生まれ。京都大学人文科学研究所准教授。専門は近現代日本の社会運動史、社会思想史。著書に『戦間期日本の社会思想「超国家」へのフロンティア』(人文書院)、『日本ファシズム論争 大戦前夜の思想家たち』(河出書房新社)、『満川亀太郎慷慨の志猶存す』(ミネルヴァ書房)がある。



〈註記〉

- 74 前掲EURO-NARASIA 16号47頁 註記34「創設のころ 養徳社創立六十年」。なお、十分に確認できていないが、新村出『新村出選集』2巻（養徳社、1945年6月）、吉井勇『定本 吉井勇歌集』（養徳社、1945年10月）の奥付には養徳社の支社として「東京都四谷区左門町一四」と記されている。
- 75 「文化講演会」『天理時報』817号、1946年5月5日付。
- 76 「会長に中山管長 大和文学会誕生」『天理時報』794号、1945年1月18日付。
- 77 「大和文学会講演会」『天理時報』790号、1945年12月9日付。  
なお、開催予定の記事には林房雄の名前もあがっている（大和文学会創立記念講演会）『天理時報』796号、1945年12月2日付。
- 78 中山正善「創刊のことば 大和文学寸感」『大和文学』1号、1946年6月。
- 79 「季刊『大和文学』発刊 新しい構想で再出発」『天理時報』877号、1947年6月29日付。
- 80 「田中克己日記 index」  
<https://cogito.jp/nef/tanaka/yakoun/tanakadiary.html>  
（最終閲覧2019年12月25日）
- 81 前掲「季刊『大和文学』発刊 新しい構想で再出発」。
- 82 「編集後記」『大和文学』1集、1947年12月。
- 83 「編集委員」『大和文学』1集、1947年12月。前掲「田中克己日記」1947年4月17日条に「養徳社の吉岡君」、同年6月3日に「養徳社より瀧井氏来り」とあるので、養徳社関係者と思われる。
- 84 なお、『大和文学』のその後については、前掲「田中克己日記」の解説に「天理教の真柱中山正善が保田與重郎の人物に魅せられ、創刊させた文芸雑誌『大和文学』も、編集部内部に彼を忌避する空気が生まれ、この年に3号を出したきり立ち消えてしまします」とある。
- 85 前掲EURO-NARASIA 16号48頁 註記44『文芸編集者の戦中戦後』232、3頁。
- 86 「編輯後記」『玄想』1巻1号、1947年3月。
- 87 同前。
- 88 なお、『玄想』創刊号（1947年3月）の「執筆者紹介」では田中克己は「天理図書館司書、詩人」となっている。
- 89 「養徳社の新陣容 社長、幹部級の改選」『天理時報』922号、1948年5月16日付。これ以外にも庄野は、1949年4月創刊の『天理文芸』で「宗教文学」の評論を担当したようである（『天理文芸』『天理時報』971号、1949年5月1日付）。
- 90 前掲「創設のころ 養徳社創立六十年」。
- 91 以下の文献を参照。加藤三重子「志賀直哉『灰色の月』のポリテクス」『成城国文学』18号、2002年3月。宮越勉「敗戦後の志賀直哉「特攻隊再教育」から「閑人妄語」まで」『文芸研究』128号、

2016年2月。

92 戦後の同心会結成、『世界』との関わり、同心会と生成会の関係などは安倍能成が「余録」(『心』1巻1号、1947年7月)で回想しているほか、志賀直哉宛の書簡(1945年11月28日付、1946年2月15日)にも会の内容や『世界』との関わりについて記載している(武者小路実篤・里見淳『志賀直哉全集 別巻 志賀直哉宛書簡』岩波書店、1974年)。当初は谷川徹三がひとりで幹事役をつとめていたと書簡にある。

93 「目次」『向日葵』1号、1947年1月。

94 「巻頭言」『心』1巻1号、1947年7月。

95 「安倍能成君」武者小路実篤『武者小路実篤全集』15巻、小学館、1990年。

96 「編集室より」『心』1巻3号、1947年9月。

97 武者小路実篤『武者小路実篤全集』18巻、小学館、1991年、223頁。

98 柳田は1948年3月に『心』に同人として参加した(前掲『柳田國男全集』別巻1)。

99 「生成会同人」『心』1巻1号、1947年7月。ただし湯川秀樹の名前はない。

100 「日本の保守主義『心』グループ」久野収・鶴見俊輔・藤田省三『戦後日本の思想』岩波書店、1959年。

101 今回論じた雑誌のなかで保守に関する文章は以下の通り。福原麟太郎「保守の精神」『人間』2巻8号、1947年8月。鈴木成高「保守といふこと」『心』2巻10号、1949年10月。田中耕太郎「進歩の論理と倫理」『心』2巻11号、1949年11月。戦後の「保守主義」を検討するのであれば、全体をバランス良くとらえたうえで、その位置づけを検討することが求められる。また『心』で言えば、鈴木よりも田中耕太郎を検討したほうがよいのではないかと思われる。